茨城論壇

LRTで街の魅力向上

整形外科医 早船 徳子

茨城には魅力的な場所がたくさんあるし、食べ物もおいしい。個人的には自慢できる土地だと思っている。しかし、都道府県の魅力度調査では2年連続47位、つまり最下位だ。なぜだろうか。

10年以上前になるが、スイスのチューリヒとバーゼルに一年間、留学していたことがある。当時、私の〝生活の足〟はLRT（新型路面電車を中心とした公共交通システムのこと）であった。路面電車とバスが連携しており、街中の至る所に移動できる。事前に切符を用意しておけば、自分の近くのドアから自由に乗ったり降りたりすればよい。

LRTを持つこの二つの都市は、街中が老若男女でにぎわっていた。水戸よりも人口が少ないバーゼルのほうが、よほど大きな街に見える。その背景には、高齢者や子連れの母親、そして私のような不慣れな外国人にとっても優しい交通環境が確立されていたことがある。スイスという小さな国が先進国の地位を維持している理由の一つは、交通環境にあるのではないかと思えた。

それに比べて我が茨城はどうであろうか。私は水戸市民だが、県庁所在地の水戸でさえ、誰もが便利で安心に移動できるとはいえない。

現在、政府は交通基本法の検討を進めており、その中で、移動する権利つまり、「交通権」という考え方が重視されている。交通権とは国民の誰もが容易に低コストで快適に移動する権利のことで、フランスでは基本的人権の一つとして位置付けられている。こうした考え方は、高齢化社会の問題に対して、一つの方向性を示している。

例えば高齢になれば、皆が自動車を運転できるわけではない。高齢者が自立した生活、つまり自分で出掛けて買物をしたり、人と会ったりすることができれば、健康が維持しやすい。

医者をしているとよく分かるが、移動がままならず、寝たきりになってしまう悲劇、さらにはそうした状況を手当てするための社会的な負担はきわめて重い。交通体系の整備は、そうした社会的な負担を減らすことにもなるだろう。

公共交通の整備は子育て支援策でもある。母親たちが小さな子を乗せて運転することも実は、危険なことなのだ。ベビーカーを押したまま利用できる便利な公共交通はそうした問題を解決してくれる。

その上、便利で分かりやすい交通手段があれば、バスや自家用車で素通りしてしまう観光客が、街中の観光スポットを巡ることもできる。水戸のような歴史ある街でその魅力を分かってもらえない理由があるとすれば、それは観光スポット間の移動方法が悪いからではないだろうか。

こうしたことを考えると、水戸ぐらいの規模の都市であれば、LRTを軸とした交通機関の再編成を、今後のまちづくりの課題として検討すべきだと思う。バリアフリー化された次世代路面電車を中心にバスやタクシー・車も含め、公共交通を効率よく再編成することにより、それぞれの機能を向上させることが可能なのだ。

年を取っても自分の力で街中まで出られ、人や社会とつながりを持ち続けることができる生活。これができれば、誰もがうらやむ魅力になるはずだ。

はやふね・のりこ　整形外科医。1960年生まれ。茨城大教育学部附属小・中学校卒。県立水戸第一高卒。聖マリアンナ医科大卒。医学博士。現在、岡崎整形外科医院長、水戸市医師会副会長、日本整形外科学会認定専門医。「高齢者と環境にやさしい交通まちづくりを考える会」世話人。水戸市在住。